

若者と居場所をつくる

——日欧のユースワークの現場から——

平塚 眞樹

〈講師紹介〉

幼児期に愛知県で育つ。京都大学教育学部卒業後、東京大学教育学研究科（修士・博士）にて教育行政学を学ぶ。京都大学教育学部助手を経て、1991年より法政大学に勤務し、現在同大学社会学部教授。専門は若者の移行期研究、特に日本と欧州の若者支援に焦点を合わせて研究している。

〈講演〉

はじめに

本日は「若者と居場所をつくる一日欧のユースワークの現場から」というタイトルとしました。ユースワークという言葉は日本であまりなじみがなく、実際に、私たちの生活世界の中にはあまりないものなのですが、おもに欧州の経験を少し紹介しながら、自分たちの生活世界のあり方を見つめ直すきっかけになればと思います。

1. 欧州における若者支援と日本の若者支援

(1) 欧州の若者支援から学ぶべきは？

「欧州の若者支援から学ぶべきは？」というふうに書きました。私はこの10年あまりヨーロッパの若者支援について学んできています。特に、イギリスとフィンランド、そして、デンマークなどをフィールドにしており、本日の内容もこれらの国々での経験をもとにしています。

地域を限定しつつも欧州には、特にEUの存在によって欧州的価値観と呼べるような欧州に普遍的な考え方もつくられてきたと思います。「欧州

の若者支援から学ぶべきは？」ということでは、欧州では、人を大人へと育む社会環境、若者全体が育つ社会環境をつくることを公的な責任と考えることが1つの欧州的価値観として挙げられます。

日本の若者支援の世界は、多くの場合が若者の個人に支援をします。例えば、ひきこもっている若者であったり、あるいは仕事の世界から排除されてしまった若者であったり、いろいろな若者たちがいますけれども、その一人一人の、困難を抱えていると呼ばれる若者たちへの支援が若者支援だと捉えられています。しかし、ヨーロッパの考え方は少し違って、個人への支援以前に、社会環境の構築が必要だと考えるわけです。

人が育つときには、必ず主体である人間と周囲の環境との相互作用によって、潜在的、顕在的变化をつくり出され、成長につながります。それは教育学で従来から言われていることだと思います。そのため、いくら個人が頑張ってみても、その周囲に本人の頑張りとうまく出会える環境がないと、頑張りは空回りにもなりますし、何をやってもうまくいかないことにもなります。同時に、環境が整えられていても、そこで生きる主体のあり方によっては、環境がうまく生かされないということもあります。

人が育つ、学ぶ、変化するときには、人という主体と、人を取り巻く環境、つまり人と環境との相互作用の中で学んだり、育ったり、変化したりするわけです。欧州の若者支援から学ぶとき、欧州では、若者全体が育つ社会環境をつくるのが公の責任であり、それが公共性だという考え方が

あることに気づきます。

(2) 排除を予防する社会環境

では、若者支援にとってどんな環境をつくるのかという問題になります。その1つが、排除の予防、すなわち子ども・若者の自立と社会参加を促し支える社会環境です。そしてもう1つが、排除からの回復に向けてやり直しを支える環境です。

1つ目の視点では、人が排除されづらい社会がつくられているか、ということが問われます。もう1つの視点では、排除をゼロにするのは困難で、常に誰かが排除されるリスクはある。その場合、排除から回復されやすい社会がつくられているかが問われます。それは、やり直しがしやすい社会ともいえると思います。これももう1つの社会環境を見る視点です。

まず1つ目の視点について述べていきます。

排除されにくい社会環境とは何かというときに、何より大事なことは、経済的保障、経済的保護です。次に、教育、職業訓練の機会保障が挙げられます。そして最後が、コミュニティや文化にかかわる機会の保障です。

近年の若者支援で重視されているのは、就労支援と呼ばれる働くことの支援です。これが日本の若者支援の中心です。しかしながら、人が社会の中で生きていく、社会の中でいろいろな人とのかわりの中で役割を持って生きていくときに、必要なのは仕事の機会だけではありません。

人が生きていける社会環境、排除されにくい社会環境をつくるときに、働きやすい社会環境というのも大切な1つの柱にはなりますが、それだけではなく、人がコミュニティや文化にかかわる機会、そういう社会環境をつくることも、人が排除されにくい社会をつくる上で大事だということを、とくに日本社会で生きる私たちは認識を深めるべきだと考えています。

これは人間にとって文化の領域がどのぐらい社会に支えられているかということです。日本の場合、文化の機会への接近は、多くの場合、子ども

の場合は家庭の、長じれば自分個人の資本によって支えられています。コミュニティや文化にかかわる機会の保障とは、家庭や地域によって文化への接近機会が不平等にされてしまうことなく、どのような家族・地域のもとに生まれ、育とうともコミュニティや文化に接近できる機会が平等、公正にあるということです。

その視点から、ユースワークと呼ばれる領域についてご紹介したいと思います。

ユースワークはヨーロッパの中で、19世紀後半に生まれ、1960年代ぐらいから制度化するようになりました。なぜ1960年代かと申しますと、それがヨーロッパの福祉国家の発達とセットであったからです。つまり国が、あるいは地方自治体が保障すべき社会環境の一つとしてユースワーク、すなわち10代の人たちに文化の機会を提供する活動をつくっていくことも国や自治体の責任と考えるようになってきたということです。

若者期、青年期（ユース）と呼ばれる時期がどういう時期かについては、もっと深く語られるべきだと思います。ここでは2つだけ挙げましたが、1つが教育、訓練、もう1つが、余暇、文化の活動に触れる時期であることです。多様な人間関係と場に参加し、経験する時期であるということです。

児童期は、基本的には自分の出自の環境の中で生きます。親元で生きるとか、生まれた場所で生きるとか。そのため、児童期の子どもたちにとっての人間関係や文化、さまざまな機会は、その出自によってある程度既定され、制限されています。だから、価値観も最初は親から学ぶ、あるいは社会秩序も自分の生まれた地域のルールを学んでいきます。

ライフサイクル上の青年期という時期は、近代の社会が生み出したわけですが、それはどういう時期かという、自分が生まれ落ちた環境、関係から抜け出して、試行錯誤をする時期です。近代以前の社会には、そうした試行錯誤の時期としての青年期はありませんでした。子ども期が終わったら、イニシエーションという成人儀礼を経て、

ある日を境に、人は子どもから大人に一気に飛ぶというのが、近代以前の社会の子どもから大人へのプロセスでした。

それに対して、近代以降の社会は青年期という時期を挟むことで、いろんな価値観の中で悩むわけです。例えば、うちのお父さんは大企業に行かなきゃだめだと言っているけれど、自分はちょっとそうかなと思っているというようなことがあります。それは、親の持っている価値観に対して、ある疑いをもつということです。そのときに、お父さんの価値観、あるいは学校の先生の価値観というのから、ちょっと自分が身を離して、果たしてそうか、ほんとうにそれは正しいのかと、考える時間が青年期になるわけです。

その試行錯誤、あるいは執行猶予（モラトリアム）とも呼ばれる時期に、さまざまな価値や文化に触れているんなもの考え方を学び、いろんなことに目が開かれていき、自分の生まれ落ちた環境や関係のルールや価値観を見つめ直していくわけですね。そのため、近代以降の青年期は、教育や訓練とともに、余暇や文化の活動、多様な人間関係と場への参加が、多様で広い視点に人が開かれていくためにどうしても必要となるのです。

皆さんも中学生ぐらいになる頃から友達とグループがつくられていったと思います。そのように思春期、青年期の時期の人間関係のグループは、共通する価値観をどこかで持つわけです。例えば、共通する趣味、共通する話題、共通する好きなもの、何か繋ぎ目というか紐帯になるものがある、たまたま隣の家だったからお友達、といった偶発的な友人関係を脱して、なんらかの価値や文化を共有する関係をだんだんつくるようになっていく。

その繋ぎ目になるものが、若者の時期には多く場合、文化が媒介します。例えば、あるミュージシャンの好きな人たち同士のグループだったり、映画を見るのが好きな人たちのグループだったりするわけですね。自然にでき上がってくるグループは、何がしか文化を媒介としながら結びついていくということがあると思います。

それは、青年期にある人が、いろんな価値を学んだり、機会や経験を得ようとするものの中に、学校における授業のような狭い意味での教育や、ある仕事につくための職業訓練といった極めて目的的な行動以外に、文化という世界がもう1つあることを意味しているわけです。誰もがふりかえれば、実はそういうものが人の育ちに結構大きなウエートを占めています。しかしながら、文化の機会、国によってどの程度の資源（お金）を配分しているかについて、かなり違いがあります。

社会環境として保障するということは、文化の機会を個々人の属性によって左右されない平等な機会として保障するということです。そのため、ユースワークを制度化するということは、地域社会で、若者が多様な文化に触れる機会を国や自治体が保障するという考え方になるわけです。そこが、自我形成、仲間づくり、試行錯誤などの青年期の営みに、みずから自由にかかわることのできる場になるということです。

ユースワークにおいて一番大事なものは、その仕事に携わる人たちが必ず言うことですが、ボランティアであることです。ボランティアという言葉は、「みずから自由に」というふうに私は訳していますが、日本でいう、いわゆるボランティアと意味が異なります。ユースワークにかかわるか、かかわらないかは、当人の自由だということです。そのため、来たい人は来る、来たくなくなったら来なくていい、自発性で成り立つ場所です。

(3) 若者の生活時間・空間とユースワーク

戦後の日本社会で、高度経済成長は1958年ぐらいから1974年ぐらいまでを指しますが、その高度経済成長の始まる頃までは、地域社会で近世以来長く続いた子どもや若者の組織が結構ありました。学校だけで子どもが育っていたわけではなく、子ども組や若衆組、娘組といった、ライフステージに応じて人を育てる地域組織がありました。つまり、コミュニティが子育てや人間形成に深くかかわっていたわけです。それは必ずしもユースワークと同じではないですが、地域社会に

は、学校でも家庭でも会社でもない、子ども、若者の時間と空間があったということです。

それが高度経済成長の頃から、子どもや若者の生活時間や生活空間は基本的に学校と企業に吸収されていったわけです。部活が大きなウェイトを占めるようになり、授業以外の時間含めて学校で長時間過ごすことが広がりました。もう1つは、企業の長時間労働です。残業し、場合によっては週末も働き、夏休みもあまりないといった生活スタイルが広がっていったわけです。

こうした生活のあり方が、バブルが崩壊する1990年代から若者の人生は大きく変わっていきます。特に非正規雇用が多くなり、企業社会に吸収されていた若者の時間が変わっていきます。

高度成長期以降の日本の成人は、男は基本的に正社員になれる社会でした。ただし女は、一度正社員になっても、その後、やめざるを得ないことが多かった社会です。女が家事育児を担い、男が企業で長時間働くことで成り立っていた社会です。それが、男も必ずしも正社員になれる社会になっていきました。今や若者の半数が非正規雇用です。そうすると、長時間残業して1つの会社で定年まで働くライフイメージは全員が共有するものでなくなるわけです。半数ぐらいの若者たちは、場合によってはダブルワークもしながら、一生懸命に日銭を稼いで何とか生きていく、一方では、会社の中で半分ぐらいは非正規の人たちになってしまいましたので、正規雇用の人は従来以上のプレッシャーの中で働かざるを得なくなりました。

高度経済成長期の日本社会は、基本的に企業が生涯にわたって人を囲い込み、その中で育成もしていました。だから、企業外の公的職業訓練の機会はあまり必要とされませんでした。しかし、半分ぐらいの人について、企業がそうやって生涯の面倒をみるのがなくなると、その人たちは生き続けるための教育や訓練を他で受けなければならなくなります。端的に言えば、数年で人を使い捨てにする社会で、人が生きていくために、何らかの職業訓練や再教育が必要になってきたわけ

です。30代半ばになると非正規雇用も得られにくくなります。そういう意味で、社会のどこかで生き続けることを支える場が、必要になってきています。

これが、若者支援と呼ばれるような業界ができてきている理由でもあります。企業が面倒を見なくなった人たちが、企業以外のところで生涯、生き続け、働き続けるためのサポートが問題となり、その欠落を補うために少しずつ若者支援の場が生まれているということです。

これとユースワークがかかわりを持っていきます。日本の社会は今見てきたような経過で、企業から排除される人たちが生まれ、その支援から始まっていますので、必然的に就労支援という、働くということの支援が中心になります。しかし、就労支援とは何かというときに、狭い意味で働き方のテクニックを教えたり、スキルを身につけたりすることでは実はないのではないかという知見が、若者支援の世界で働く人たちの間で気づかれるようになりました。その中で、ユースワークへの関心、それはどういうふうに若者に関わる活動なのか、狭い意味での就労支援とはどこが違うのかという関心が広がり始めています。

2. 欧州におけるユースワークの実際

(1) ユースワークとはなにか?

ユースワークとは一体どのように定義されているのか、ここではイギリスとフィンランドの例を見ていきたいと思います。これ(図1)はイギリスのイングランドにおける、ナショナル・ユース・エージェンシーという全国協議会による定義です。そこでは、「楽しさや挑戦を含んだ学びです」とか、「活動の中心をなすのは信頼関係をつくること」、「個々人であるいは集団で経験を通して学ぶこと」、「意思決定とか自尊感情の醸成とアイデンティティ探求などができる安全な場所」、それから、「基盤となる価値、若者の視点や声が大事」、「若者へのリスクが大事」、それから、「若者を問題視しない、育成的な環境が必要」というこ

ユースワークとはなにか？(1)

イギリスNational Youth Agencyによる定義

- ・楽しさや挑戦を含んだ自己・他者・社会の学び
- ・活動の中心をなす信頼関係の構築
- ・個々人で、あるいは集団での経験を通じた学び
- ・意思決定、自尊感情の醸成、アイデンティティ探求のできる安全な場
- ・基盤となる価値＝若者の視点・声、若者への敬意、関係性・集団性・多様性、「問題視」せぬ育成的環境

図1 イングランドのユースワークの定義

ユースワークとはなにか？(2)

イギリスYouth Link Scotlandによる定義

- ・「子どもの権利条約12条」実現のカギを握る役割
- ・若者の学習と発達に寄与する教育的実践
- ・地域における文化や仲間関係のネットワークを広げていく活動
- ・潜在的な力量を引き出し、人生の試練にクリティカルに創造的に立ち向かう援助

図2 スコットランドのユースワークの定義

とが言われています。

次にスコットランドの例です（図2）。スコットランドにおけるユースワークの全国協議会ユースリンク・スコットランドは、『『子どもの権利条約』の12条—子どもの権利、子どもの参加を定義した条文—の実現の鍵を握る役割』や、「子どもの学習や発達に寄与する教育的に実践」や、「地域における文化や仲間関係のネットワークをつくること」、「潜在的な力量を引き出して、人生の試練にクリティカルに創造的に立ち向かう活動」とユースワークを定義しています。

ここでは、決められたカリキュラムがあって、受動的に学ぶのではなく、ボランティアに、つまりやりたいと思う人が自発的にやってきてそこに場が生まれ、そこでやってみたいと思うことをやる、活動を通して充実感や、仲間と一緒に活動を楽しめる経験、あるいは若者期と呼ばれる時期に、親も教師も、大人はみんな嫌いと思うような時期に、ユースワーカーの存在にふれて、大人でも自分たちの話をよく聞いてくれる、ちょっと違う人たちがいるんだなど、大人とのあらたな信頼関係を築いたりする。その中で、自分も捨てたものじゃないなとか、人生って悪いばかりでもないなとか、そういう経験を徐々に醸成していく活動です。

フィンランドでは、若者法と呼ばれるユースワークを規定した法律があります。そこに法の目的が記されていて、「(1) 若者が社会で影響力を

発揮できる機会を提供する、その能力や可能性が社会で役立つように育成を図ること、(2) 若者の成長と自立や連帯感情を育み、そのために必要な知識と力量の獲得を支援すること、(3) 若者の豊かな自由時間の追求と市民社会への参加を支援すること、(4) 差別がなく平等な若者同士の関係を促し権利の実現を図ること、そして、ユースワークとは社会における若者の成長、自立、社会的包摂を援助する取り組み」と記されています。

ここで規定されている、(3) の若者の豊かな自由時間の追求、これが職業訓練と違うところです。つまりユースワークというのは自由時間の中に成り立つ活動なのです。だから、自由に参加できる、自分の自由時間を使って自由に参加する活動、その時間や空間が社会によって等しく保障されているかどうか、長い目で見て若者が社会の中で有能な存在になれるかどうか、一人一人の若者が持っている可能性が社会に役立つようになるかということにかかわると、私は考えています。

(2) ユースワークの種類と実際

ユースワークの活動には、いくつかのカテゴリーがあります。

まず、誰にも開かれたユースワーク、ユニバーサル・ユースワークと呼ばれるものですが、これは日本の児童館のような感じで中学校区単位ぐらいでユースセンターがあったり、あるいは遊び場、プレイグラウンドみたいなものがあったり、文化

やスポーツのプロジェクトがあったりします。

次にシティズンシップを促すユースワーク。これは、若者議会とか若者市役所など、若者たちがつくる議会や市役所の活動もあり、実際に若者に関わる一定の事柄の意思決定にも参加します。

最後に、特別なニーズを持つ若者向けのユースワークです。これはなんらかの意味で特別な援助を必要としている若者を対象としたもので、町に出かけて若者と関わるストリートユースワーク、福祉的なユースワーク、学校におけるユースワークなどがあります。この学校におけるユースワークは、学校になじみにくい子ども・若者へのかかわりをしています。

これがフィンランドのユースセンターです(図3)。ここに写っているのはロビー空間で、この周りに体育館や音楽スタジオ、お裁縫をする部屋やシアター風の小さな部屋があったりします。特に音楽の場合、ドラムやギターなどの高価な楽器を備えていて、スタジオも無料で借りられるのが魅力で、自由な音楽活動の裾野を広げていく上で大事だと言われています。

これは、ビリヤード台があって、そこで遊んだりできる一般的なユースセンターです(図4)。これはこたつみたいな感じで人が座っておしゃべりできる場(図5)。共通して意識されているのは、関係や場が生まれやすい環境をつくっていることです。来る子どもは自由に来ていいことになっているので、友達と一緒に来る子もいれば1人で来る子もいます。

1人で来て、ユースワーカーとしゃべって帰る、最初のうちはそれだけでも、そのうちユースワーカーが、そうしたおなじみの子が来たときに、今ちょっとこの子たちとしゃべっているから、あなたも一緒にやらないみたいな感じで、トランプに誘ってみるとか、ちょっとしたおしゃべりの輪の中に誘ったり、そうやってワーカーたちは、自分が若者たちから信頼される大人になることを通じて、若者たち同士をつないでいくことを非常に意識しています。これは、あるフィンランドのユースセンターで女の子たちがいっぱい来て、放課後

の時間を楽しんでいる様子です(図6)。

このユースワークの施設は、プロ顔負けの設備があるところで、ここはテレビスタジオです(図7)。ヘルシンキ市の場合、ユースセンターは中学校区に1カ所ぐらいずつありますが、この大きなユースセンターは市内に1カ所だけあります。これは、個々の中学校区単位のユースセンターの設備では飽き足りなくなった若者たち、つまり、趣味が高じてセミプロ級になってきた若者たちのニーズを満たすために作られたユースセンターです。

ここから発信されるテレビ放送は、ヘルシンキ市内でオンエアされています。またこのセンターで製作される新聞記事は、フィンランドで発行される新聞の一部に組み入れられることもありますが、その際、それが若者によって書かれていることは記されないそうです。小学生新聞とか大学生たちがつくった記事ですといった、エクスキューズを設けず、普通の新聞記事として出せる水準になったら掲載しようという条件で、ジャーナリズムのプロジェクトがここで行われていて、時々そうして集まった若者たちによる新聞記事が、ただ記者名だけ記されて掲載されるそうです。

これは、フィンランドのヘルシンキ市役所の人たちを前に置いて、高校生たちが自分たち若者にかかわる市政の問題について議論をする場所です(図8)。これは各高校から2人ずつくらい代表の



図3 フィンランドのユースセンター

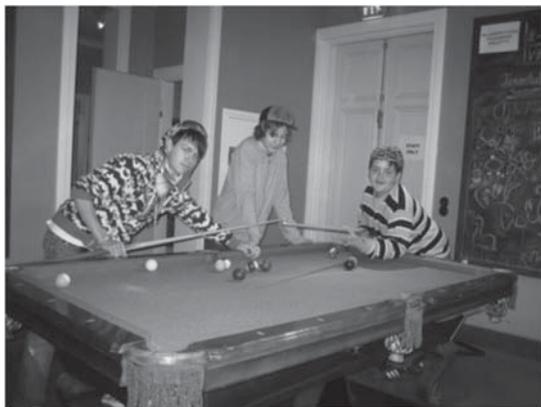


図4 ユニバーサル・ユースワーク (1)



図7 ユースセンターのテレビスタジオ



図5 ユニバーサル・ユースワーク (2)



図8 シティズンシップを促すユースワーク



図6 フィンランドのユースセンターの様子



図9 女性向けのユースセンター

人たちが出てきています。私たちはわりと気づかずにいますけれども、政治の世界は多くの場合、子どもや若者に関することも、若者の意見を聞かずに決めているわけですね。

それに異議を申し立てるのが、先ほどのフィンランド若者法の精神です。18歳以下の子どもには選挙権がありません。したがって、選挙権がない人たちにかかわる政治問題については、必ず、選挙以外の方法で、その人たちの意見を聞くことが法律で決められているわけです。法に規定されて、あらゆる事柄、教育に限らず、公園事業なども含めて、18歳以下の人たちにかかわる施策を決めるときには必ずその意見を聴取しなければならないことになっています。

特定の若者向けのユースワークもあり、女の子向けのユースセンターとか、あるいは黒人の人たちにターゲットを絞ったユースワーク、イスラムの人たちにターゲットを絞ったユースワークなどもあります。あるいはアルコール依存の若者にかかわるユースワークといったものもあります。これが先ほどの特別な支援を必要とするユースワークです。

これは、フィンランドにある女の子向けのユースセンター、ここは女性しか来られません(図9)。妊娠した女の子が誰にも相談できずにここを訪れ、適切な場所にその後つながっていくなど、そういうこともあったりする場です。

これは、特別な支援を必要とする人たちへのユースワークの中でも、アルコール依存の若者たちと活動するユースワークの現場です(図10)。このプロジェクトでは、数ヶ月かけてクラシックカーをつくることに取り組んでいました。

ユースセンターで待っているだけでは、アルコール依存などの困難な状態にある若者たちがやって来ることは期待できません。そのため、ストリートワークと呼ばれますが、ユースワーカー自身が夕方から夜10時ぐらいまで、町の中をチームを組んで歩きながら、若者たちに声をかけつつ、辛抱強く彼・彼女たちから受け入れられ、信頼関係がつけられるよう待ちます。そのうち、おもしろいことを一緒にやらないかといえるぐらいの関係をつくられていき、いずれ仲間を集めて、例えばこうしたプロジェクトが生まれたりもします。

これは、バイク・ユースワークといわれるユースセンターです。(図11)どの国でも暴走族のようなものはあり、結構危ない様子でバイクを乗り回す若者たちがいるわけですね。そこで、自分もバイクが好きなユースワーカーが、そういった暴走族グループに少しずつ接近していきながら、いろいろしゃべっているうちに結構おもしろいやつだと受け入れられていって、彼らの場合、1年ぐらいたつころには暴走族グループの先頭を走れるようになったそうです。そして、だんだんにそのグループのメンバーから頼りにされていきます。

特別な形態のユースワーク

ストリート・ワーク
街中の若者の生きる場(若者文化)で、信頼しあえる関わりをつくる



図10 アルコール依存の若者のユースワーク



図11 バイク・ユースワークの様子

そうすると、実はちょっと相談があるんだけどといった、本当はだれか大人に相談したかったことを相談してくれたりもするようになります。

そこから、うちのユースセンターにはバイクの修理ができるところもあるよと、君のこのバイク、ちょっと危ないから、一度整備に来ないとかなどと誘って、やって来たら、バイクの整備をしながらそこでしゃべる。ここでは、整備をすること自身が目的ではなく、バイク整備はいわば媒介項で、その整備をする活動を通じて若者とワーカーが関係をつくり、ほんとうにその若者が困っていることや、ほんとうにその若者が必要としていることにつないでいく、そうしたかわりをしています。

これは、私が会ってきたユースワークの世界で育ってきた若者たちです（図 12）。左上はイギリスの若者、ユースセンターの運営にかかわっています。右上は、先ほどのストリートワークで危ない状態だったのを引っ張り上げられて、人生が救われ、その後、カレッジに進学して、いまは社会福祉を学んでいて、自分が救われたように自分も人を救う立場に立ちたいと今思っている双子の女性です。

左下の人もやはりイギリスの若者ですがけれども、やはり非常にシリアスな状態にあるところをストリートワークのユースワーカーに救われて、ユースセンターに通うようになり、いまは自分自身ユースワーカーになりたいと思って、大学で

ユースワークを勉強している若者です。

右下は、フィンランドで出会った若者で、いま訓練生としてユースワーカーになろうとしています。彼は移民の子どもとしてフィンランドにきて、コミュニティになじめず、ユースセンターだけが自分の行ける場所だったと話していました。

ユースワークの世界では、そこで自分が救われたと感じる若者たちが、こういう世界の大事さに気づき、にもかかわらずあまり人に知られていないのはおかしいじゃないかと——ヨーロッパでもそんなに知られていないわけです——思うようになり、それで、自分自身その担い手になろうと考えるようになる、そういうストーリーが結構多くあります。

3. 再スタートがしやすい社会環境

最後に、一度「排除」されたとしても回復しやすい、やり直ししやすい社会環境をつくる、という視点についてみていきましょう。これも、3つの条件から構成されます。第一には、やはり排除されたときにどんな経済的保障があるかということです。これなくして、それ以外の話をしても意味がありません。

2番目は学び直しの機会、これは職業訓練や教育の機会のことです。そのような場がなければ、社会への再参入は難しいものです。やり直しをするためには家と職場の両方がそれを許容する環境をもっていることが必要になります。本人のやる気だけでなく、生涯にわたる学び直しの機会を機能させる家庭や職場の環境が十全にあるかということです。

そして第3に、やり直しのための上記以外の多様な制度とそれを支える専門職の存在が挙げられます。ここでは、ユースワークの外延にあるプロダクションスクール（Production School）、あるいはユースワークショップ（Youth Workshop）と呼ばれる仕組みについて取り上げます。これは今、EU圏で広がりつつあるもので、デンマークとドイツから始まり、フィンランドに広がり、ほかの



図 12 ユースワークで出会った若者たち

国にも少しずつ広がっていています。

これは、再スタートに向けた公的な制度です。対象になっているのは、学校を中退したり、失業したり、無業であったりする若者たちです。期間は、国によって違いがありますが、半年から1年ぐらいで、それぞれの若者が関心のある領域を選んで、少グループで生産活動を行います。

大事な点は、無業の状態にある若者を、職業訓練や教育の機会にいきなりつなげないことです。失業した、無業になった、ひきこもっている、そこから社会参加を意図して職業訓練の機会につなげようとしてもうまくいかないことが多くあります。プロダクションスクールやユースワークショップがつくってきたのは、「移行的労働市場(Transitional Labour Market)」と呼ばれていますが、働いていない状態と働いている状態の間の、踊り場のような領域です。

ここは正規の職業訓練の場ではないので、適性や能力を問われず、誰もがやりたいことができます。音楽が好きなら音楽、アートや調理がやってみたかったらそれと。ただ、それがそのまま職業に到るわけではないということが、はっきりしているわけです。

自分のやりたいことを少人数でやるという活動を通して目指しているのは、生活や友人関係のあり方の修復です。昼夜逆転した生活になっている場合は、朝起きて昼間人と触れ合って夜は寝るといった当たり前の生活に戻していく。規則正しい生活習慣は大事とか、そんなことを百万遍言われてもどうにもならないことが多いですが、自然に朝起きて夜寝る生活になっていけば、それでいいわけですね。また、ほとんどの場合、人との関係からも疎外されていることが多いので、ここでもう一度、信頼できる人との関係を少しずつ作り直してもいい。

だから、ここでもアート、音楽、調理といった彼らのやりたい活動は、そうして生活と人間関係を再建していくための媒介項です。先ほどのユースワークの場合の媒介項と同じです。それ自身を職業へと結びつけることが目的ではなくて、それ

らを用いることでなし遂げられることをする、という意味で大事なものです。

デンマークでもフィンランドでも、この活動に参加することで、失業手当や交通費、食事代が、支給されます。自分で授業料や交通費などの、活動に参加するためのお金を払って来るのではなく、ここに来ることでお金がもらえるわけです。最初はそれが1つのインセンティブになります。職業訓練の機会ではないので職業資格は取れません。しかし、ここでの実習経験は履歴書に書けることになっています。そのため、次に向けての一步にはなります。

このような場合は、デンマークでは90校、フィンランドでは200カ所ぐらいあります。デンマークはフィンランドより一カ所の規模が大きいので数は少なくなります。デンマークもフィンランドも人口でいうと日本の約25分の1ぐらいです。だから、日本の人口にこれを対比すれば、これに25倍ぐらい掛けたらいいわけです。フィンランドレベルの場であったら、日本の人口規模では5000カ所ぐらいになります。そうすると、都道府県単位では、平均100カ所ぐらいになります。実際にはどうでしょう。移行的労働市場と呼ばれる場はほんの少しずつ日本の中でも生まれてきています。ただ現状は、日本全国で数えられるほどしかありません。

排除の危機にある若者が同じ困難を負った他者と活動する、社会にかかわるといったことを通じて、自分や他者や社会への信頼を回復していくこと。多くの若者は、自己と、他者と、社会への不信任感、その全てで傷つけられていますので、回復すべきは、自分と、他者と、社会への信頼です。それらの回復を通じて、はじめて次の課題である、教育、訓練、就労といったものに向かうことができるという考え方に立って、こうした制度はつくられています。

再スタートのためには、教育、訓練、就労に向かうことが当然必要ですが、そこに行くためには、そこに向かう人間の内なる主体性が必要であり、その主体性は、自分や他者や社会への信頼感を回

復しなければ立ち上がらない、ならばまずそれを立ち上げていくための場を公につくろうということです。

デンマークのプロダクションスクールの校長先生が、ここの先生たちは、ここにいていい、そのままのあなたで大丈夫だよ、人と違っていてもいいんだよと、そういう安心できる環境をつくるのが仕事ですとおっしゃっていました。信頼して、敬意を持って対応されることで通じ合うものがあると。今のあなたのみで大丈夫だよと言われることは最も基本的な自己への信頼の基礎です。こんな自分じゃダメなんじゃないかと思っているところから、今の自分でも大丈夫と思えるようになることは、自己への信頼回復の基礎になるものでしょう、そんなことを仰っていました。

おわりに

人を大人へと育む社会環境を若者とともにつく

るときに、何が大事なのでしょう。

それは、自分が表現できる場があること、そして同時に自分が聞き取られる場があること、そう感じられる信頼できる場があることです。学校と同時に学校の外でも、人と出会える、つながることができること。学校で排除されることもありますから、学校以外にも場があることは大切です。

それから、失敗してもやり直していく支えになる場があるということです。

若者の支援では、若者個人を個別に支援することも必要ですが、それ以前に、若者が育ちやすく、再スタートしやすい、そういう社会環境や場を、若者たちとともにこの社会につくること、それが問われているのではないのでしょうか。